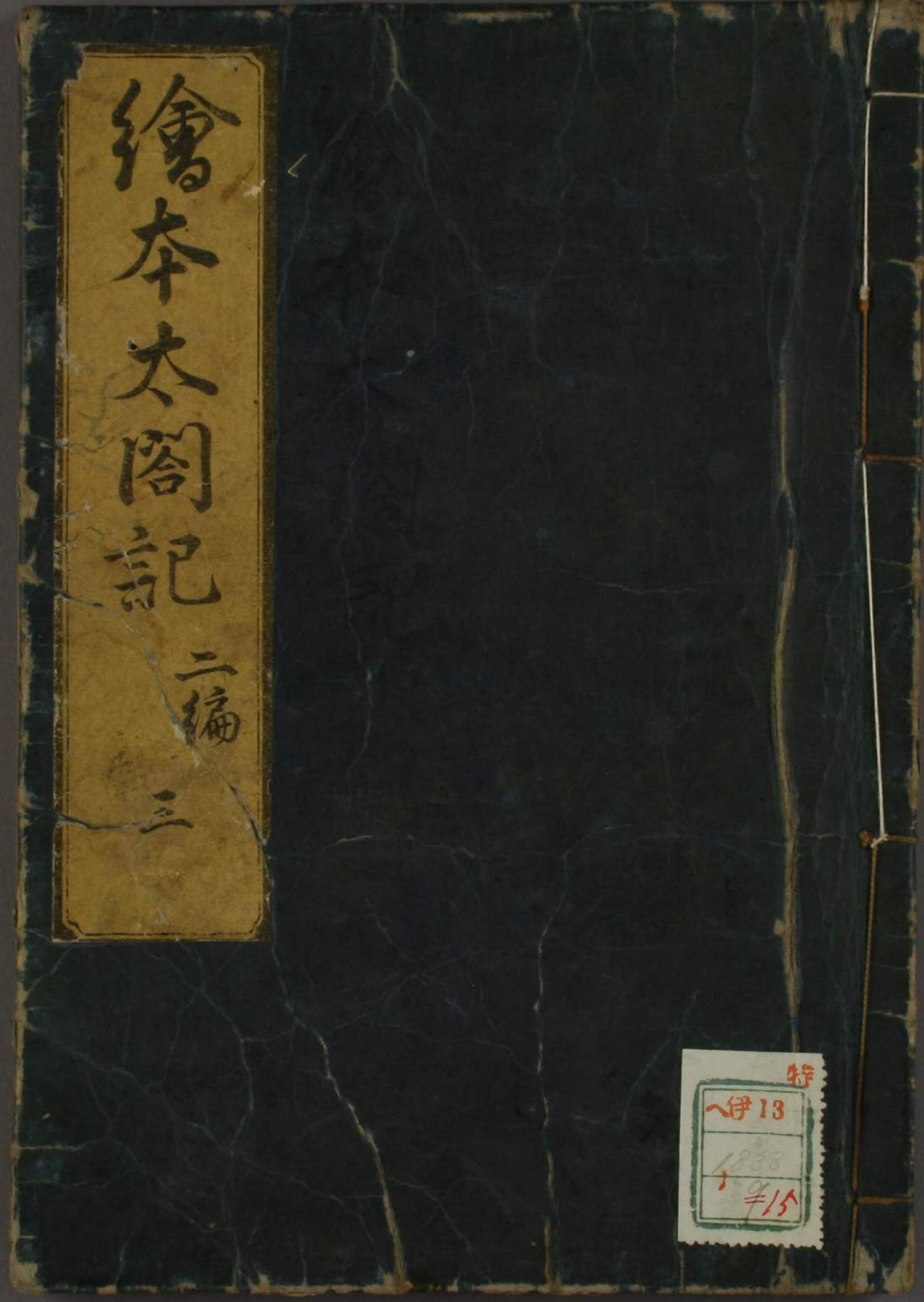






繪本左圖記二篇卷之三

目録

加茂虎之助長溪領巡見

本村又義母と大九郎仕渡

石田三成仕秀吉

佐々木義復長光寺城断水之手

本下反吉郎龍取給江城

碎水瓶勝家我兼復

信長に忍致向

信長長政三田村張陣

姉川合戦之始末

繪本古圖記二篇卷之三

加着虎之助長濱領巡見

心合ふとて其誠親しき合ふ時ハ骨肉寇敵とも此時非并依
 系守長政ハ信長直ニ帰國長しと押ひたるふたへて將
 系都みちよりこれハ船倉と申合せ濃洲岐阜の城を攻る勢ハ
 みのりて上洛せん度く船倉方中はさうこれと義景と教
 表の合戦本下反吉郎は十分討破られ進み戦ふ勢もなり長
 政ハ計み合討せ長政腕を振て何れも勢たらばて終なる
 の圖をさぐせりされハ信長卿意なり濃洲へらせひ上方押へ乃
 めめとて長光寺の城み柴田勝家籠らせ安土の城み中川虎馬
 今月八節右衛門守らせ長濱の城み本下反吉郎をぞ居し



加茂虎之助
長次郎
巡見



々々本下辰吉郎被地入部下日より親分の百姓町人をるのけ親
 親に法令を定む邪心を起し曲直を希し政道明らかりけり
 長湊領の百姓町人よりる限りはたれが敵國の仇敵狼藉と戒
 めんと辰吉郎が旗本加辰虎之助後藤市松等日毎に村里を巡見
 し悪徳の者を捕へんとある時に及小谷と長湊の境に浪人の喧嘩
 あり其数一人の浪人男の長六尺余と白く髪黒く身は教養あり
 衣をまどと腰に白き大巾を帯し乱舞して樹の根を掘り
 糸後をちりて部より々々二人の浪人男の身の上けぬ又又漢どき
 眼をく星目ほどく破衣を穿し酩酊して一歩四く一歩四く彼
 男の部を傍より歩けりいかにてまづとんまうの白くたれより
 さて兩人ともは起りてふに怒りかの小男まづ罵てやういふ彼を

懐らば又足を伸て平卧をば人をてはまづしむる事怪かり我と
 勝負をばして討勝て後心のまふみ外でとふ又又男大きは怒りてやけ
 我も何者かれば我うまゝ腹を穿れを合戦もかく云ふよくけ熟睡
 の最とさし割へ我をばして言ふ我へ一言をきき何ぞぞや我を
 又腹をさげばやまを流して通らば家までさるる一掴み殺して
 くもんと云ふ我はろげく立向へ陣の小男まをく怒りて力も振る
 向ふより双方たがひは白刃と接せし隙に辰吉郎切込込入達し又又先の光の
 秋の夜の稲妻の如くとれ合を結ぶの言の帛を裂くは似たり双方者
 らぬ別勇たがひは勝負のまゝ又又からばす時むり我う此時加辰
 虎之助例のおとく領内地方控かして士卒三十騎引具しけり
 々々が兩人が我ありとま虎のおとく狼のおとく其まゝとれりて是に

虎之助心中又其勇壯と感とられど云周りと巡見の時かれがた迎て
 玄んが雄とあ人たる捕と士率に下知してたまきうり彼浪人も大
 きな事あり我々兩人けりあ勝負をうると何のたまふげありて捕
 んとともや其後ちうい海と我が勝負と延し先此者をうち殺妨けと
 拂ふて後ゆうくと我ふととあ人もは試合をやめ加藤が手下を
 おもひに縦横を盡し切立と三十余人の士率ども右姓た姓へ迎敷う
 虎之助これを見て大きに怒り悪き奴原いで我々並を見とて
 三尺七寸あつる長光の太刀援ては兩人目かけ立む二人の浪人徐々
 怒りこいつとさげちる時即ちあ人一度は切先を盡し討てくれと虎之
 助右へはたさるべし我の附入ふといふに三時計我ひーダ三人もに精
 神益加り飛ちあつとまは猛虎れ怒るがごとく身をうけて切込む

勢ひの飛龍も似たり三十余人の士率どもは我ひを見物して懐抱と酔
 れがどしに時一人の大男いふ思ひん飛退く詞知けけ暫く我と止む
 久一言やとるのいふと二人の小男も刀とそむけ引退き我もやと
 たと一車あり暫時我ひをゆけあつとふ家とゆひく虎之助兩人を嘆
 てやうの海鳥何もの守ははる者とも知れどとてうに當領内と周し
 闘争は及ぶの足道とはじき狼藉はつとや我の當長溪の領主本下
 辰右即秀吉が臣加藤虎之助清正とふ者たり主人の位を世り領
 主と見ゆの役目かれは飛鳥の若成悉くとも久紀明たけに我職なり
 やはの筋によりたふ強敵ありと刀投げ松の本蔭は挨拶を立させ
 勇くと腰おけ兩人がや案によりて引捕へく史記せんと暫く
 時宜を見合せたれ



石田三成
秀吉より
信長より



本村又義兵と大九郎仕法心

は時一人の大男加茂を以て歸り謹でやうに我幼雅より力業をこのこ
角力と嗜み長く國を武者修飾し善く人と力量を競べぬと
と君の如くたう勇威ある人な合しるは我の本村又義と
や浪人にく出國の志林を以て年月を過し修り先祖と
もかこがはれどやう多天皇の末流統く本の一族なれど時世
よりて統く本の家の業を本村家の表徴し民間は皇親経るや
我百年姓氏よりなきが如く開運の期もあはれ終るる名真と
と日疾船着を思ふ今我國の時を以て君を以てはんとかたは
あらば我一人の老母あり以日病み死せざる具をせまけり
今小谷の町よりて醫をむんとせしむる彼醫師他國よりて

おまけに老母の病に醫師の術を以てするのうと心非甚りのう
酒店に入る酒の味かたのごとく沈滞し此男と兼論する
よりぬる宿縁や思ひに君も福し某日ごろの希ひ既く受
より君とて終いどんば今より後の命を君とてげ大馬の旁と受
し仕へまうんとす時一人の小男も日ごとく虎之助が弟に
をさげ某と防民の浪人おと大九郎と市者之父いおと又即ち雷
とく大内義隆おとすしが大内家滅その後毛利おとす度
あるとつとも父五郎兵衛節と守つて教て使へど山林おと
強し世のつとを心とせど其時某幼雅ありて修り山林を
修飾し年積りく二十一歳三年以前兩親を失ひ諸國を武者
修飾して経たりし浪人の身のちうひめく一身を救ふた衣

腹を濡るるに食はけと来りしは是なる本村
 又熟醉し睡眠の体身ぬれ麻服をまゝとも腰を帯せし二
 刀をこれに付て送物此奴殺してあ刀をうづひぬと刀に
 うけありし人相背柄由緒ありげなる浪人腹にを切んも腹は
 と噴きをまうけ只今のありさまうけども君み拜喝しなまう
 日來の本寺何うも是ぬまうや某が不徳をきうひ給ひて一命
 を君にうけまうと伝きまうんと腹を大地にうけて屈伏し
 て見へたれば加差虎之助大にうろこび二士の厚情感嘆おろし
 給ふも我も若年小方ありて海客を扶抱しき力あり給ふ
 豪傑の心も利のみにあらず義より命を重しとせ
 どく人の會合豈私のありんや抱き宿縁ありてこそ後の

約をなせ二士の誠情よまうせ今より虎之助が良等なりぞ我も後
 ひ長溪よ来るべしとやたればぬ人も大にうろこび大九郎のそ
 まり虎之助は路より又我の老母の病且夕とせまうぬき給ふも
 も見果て後世よ来しは(まう)んと虎之助大九郎は長溪へへ
 四里へこそいゆりたる

石田三成仕秀吉

長溪の城より本下長右郎軍勢のつとまひ給ひ日領内を擧げて終日
 馳ありきうが咽喝してあへたれば親善寺とて山寺に入て客殿
 とあがりき方の振側は腰かけて茶の茶をさしあうたれば僧侶
 出で禮をばし小童は令ど茶碗をさしむけ童は右良太藤は
 て津童のじやうと煖茶にうりたる天目は一茶茶をぬるく



佐々木
 兼復
 長光寺の
 城の水の
 新

真言宗

て臺より中細をそくちなる後若即一息も吾がくききうく
 今一服と乞ぬと彼童子又烏下てきおはゆらういし熱く茶乃
 お量もつらばは足らば後若即此童子の才智を心み感へ試み
 一服を不居とる小俤の事子け度小茶碗の旨形なりふも熱き
 茶と少しむらとてきおは後若即此童子は感心し近く拓きく性
 を同く臺より僅でやうの小童に及石田村の産み農家に
 又ちつとや某の仇者と嘆いと苦後若即此童子は仇を容儀
 を乞へ後僧とて長溪は是より小姓とぬて其龍巻並
 ぶ若は後立身して石田治部お捕三蔵とて奉納の二人
 佐々本義復長光寺燃断水之手

去程ぬは忍の佐々本入る義復の先は信長の御路成さきり討たん

結構せよ却て後小せしを勝り又軍勢を集め郷民をかたらし
 み余人多く信長が勇め柴田勝家が籠もる長光寺の城(也)
 よせに方と田と息をもはがむ攻りつる時元龜元年又月廿日
 かり此長光寺の城の要害も堅固なりは元龜元年又月廿日
 百余人とを龍城をさるるに元龜元年又月廿日
 されども名は得し勝家なりは奇の太軍と事とせは持は
 堅く矢石は飛べ防ぎ戦ふるを元龜元年又月廿日
 之を結ぶ佐々本方の士卒も死傷の者多うされは太義復
 家老三雲新左衛門と斗て城中の水の多きう渇水とせんぞ
 もうろろ元龜元年又月廿日城中の水の多きう渇水とせんぞ
 是は勝家も水の多し心と付救ふの兵士を守らせは太義復



真跡記三篇卷三

水をたぐりたるも兼復大勢を以て彼に極むるを切爲し
一滴も城中へ水を入らざるや抑ひて柴田の軍兵大に苦みお節
甚月のゆかりに数日雨なく暑暑焼がどく皆く渴く同へ外へ
今の大敵をふせざるに力もなかり安やかしこにお伏せ兼復此
を晴るも一平其助とて者を使者に勝を城を用き退
城せし抑ひて城中の士卒悉く命を全し来りて本國へ
らるるも一異城を抑ひて急大軍一たび攻浩城目下
はるるも多勢の命を思ひよく退居せしと演るに勝
大の眼をえりきまを勵してやうに我に中くも出城の
みえりて依り本家の前軍は固し何れを以てとて城を
どくや城中をまゐりて盡く軍兵脱る人み余り元より

籠城の士卒悉く必死と定められ死をえりて其元へくるがどく
あられ兼復勇奇なり我軍勢と死を争ひ急粉のおどく
んものと以ての死を換へて席を蹴立て入るに使者を
平其其助とて命をえりて次の同へ出るも救多の軍兵
を以て体活し面を以ていふを以て城中水のほたるも
どく其助星をえりて大に驚きた味方の案こそお遠なれ
そは城をえりて兼復はまうくと物ぐられ兼復も其驚き
城中はみやうけぬらんといふ天より一道の水活を通し
はきれぬあまきと居たりつてさうなる大おこれに勝
か智略のくまきと水のまきありさまをばあまの軍と欺
一時の計略なり



本下反若郎
魁の城を
強ひて
取らる



本下辰吉郎新築取船に城

此所本下辰吉郎長濱に在城して兼復長光寺の城の水のみを
断切取る急を急とせしむるに勝れ易きものおはるるに兼復いふ
まゝるるも容易落城するものなりけり陸に兼復入るが居城懸
いの城を攻めれば長光寺の圍もをのづゝ解勝れも命令くあ
令の計と長濱の百姓百余人は兵士の勇壮なるを以て十余人まで
六月三日計策を押し懸いの城に到りし其後より加茂後藤等
勇兵一万余人のびやりぬ打ちつた時懸いの城に懸におぼ守
高瀬刑部両大おそく余人兼復の面を守居るものなりけり
るるに城におはるるに長光寺の改めより大おの令と又系
以後よりく門を開くにゆゑと嘆りたるふぞる刑部急ぎ橋より

見ゆれば百姓と見えてんゆに松明をとり二百人たり小具
兵士五六騎堀際より立て大書よりく長光寺の城の水れと
切し復に城中甚困窮し今日降参のうを中より人衆に
百姓二百人清ぬきと宛実居分明なりされば今宵先遣城へ
明早朝は長光寺の落をいふうゆと斗ふぞこの漸ゆのまむ
先け人衆を城中へ入れゆとや々に刑部松明の光よりよく見
まば一揆の郷民にお達るるにや知をいふく門を開き人衆と
んととけけ民の中より一最なる本下辰吉郎等城門より列や言や
をもりけり城兵七人切倒し一日は城よりけ入率に圍をゆる
かゝり切てまわれに城中不意のゆかりに誰か防ぎ人者もあ
うらふまゝり強執と本下が勇兵一万余人加茂後藤の強に

馳来りて方八方よりけ巡り發せざる城兵を片端より切まれば
大將總に高瀬等も防戦とて思案も出た途とあつて迎さまよひ
城門の開とすふ幸は遠くのづれて迎出る所本下勢ふぐれ敵
を討つるれ只城外へ退出せとて向ふの切とて受けへ迎せと
うけらせむ城兵等我々と争ふと本下を山長光寺の陣所中
よりたれはす討ぶるに何のふもなく懸にの城を棄る中九入て
休息しけ有長溪の城へ進進と

碎水瓶勝家戦果復

け時長光寺の城中にいお日水は溜し今い終るまで水瓶もあつ
かり天水をたの一日くと籠城とれど時をい月と旬をいゆ
ぐぬを暑くして一滴の雨もふりて士卒等溜は苦く病は即の

多し大將此田勝家終るまであを懸見とるふ今もや水瓶三つの
とあつて其餘の水とて一滴もは勝家い水瓶を廣堀に居させと下
の兵士を悉くあつてやうい我信長との命とて山長を守る今
大軍は圍込ぬと二度も城山の恥辱を蒙りて防戦とるゆ
ゝは汝等が命と守る忠戦をさげむが故に今水のみとあつて
既に城中溜死せんとし不詮心と一被うて討て出て討死せんと思ふ
かり汝等目ざろ信義を全ふし我と死を伴ひなうは生者の面目
死後の不届何ゆふ是とまうんやされども老うて又母難き小回など
あゝん者い心まうせむ城を捨てあつて一と眼とい思ひ死
をいゝせんと思ふのい此水瓶のいゝとて水寄水をのいけ程うに湯
とるい勇将をまうて我ふべと柄板陶器を敷き出させ



水瓶を
碎て
勝家
を復
す
哉



机は尻に扣う士卒たふ勇は城の中そ水は溜り死せん討て出で
討死せん我くが予む不圖磨の磨りそ水は溜る鐵砲を鳴え
も口喘いでや思ふまゝ水との心よく討死し武士の魂とるや
とて一人も落し給う三つの水瓶はまゝうて汲みて吾がに皆
討死しと飲みしや勝をたにうらびいまだはれし槍も刀
も折るまで切死せよ兵どもと大音はなり門をけつと立てり水瓶
のえは三寄討死と定むとい水の流も交差と長刀の石突と三つ
の瓶を突碎き馬引せううらふ六月三日の曉いんづのそ
あゝとて勢八百余人城門をたに開き山も崩るむろり鯨波と
なりあまの波へま一文字は切てうらひあまの波中大に發せま
東雲の明中て歎味方えかちみされ防ご我ふ者一人もた
く

冬暑は終る素肌やと居る民者もありたまへ甲冑をせし
槍も刀も折じとあまの西へかびとに度倍みめそ級走は城兵
いふを限りと思ひ定むされ日ごろの勇音百倍一切伏せ
ぬれはまゝ本陣を倒とぞく屍の山を築にけり大なる義旗三
雲新た湧門右田は雲守等士卒と下知し敵の小勢たうぞ度時
うけは備をきて我へとせぬと制する不(懸)の城はあま
懸にお控守高瀬刑部本に城を棄る士卒諸もせんぐ
ふぬと近來り軍の始終を捕られ義旗今いふ身もまびと三
雲吉田も助けられ石部をきて近郊はたぬうれむくなりしむ
誰う踊止つと我ふのめきやいと久周を強し士卒は民凡
本の義の教とく好方たうぞ近來り勇といふに城兵も備を

其二



引て退討せし首をえり三百余級十分の勝利を得て勝國を
救及揚げ勇を収む城中へ引入りやぐて其首をも持せ信長へ
進軍の次第言上りし信長より感づき勝國が勇壯今
又神妙といひし水籠を打破き其勇氣昂然の士の及ぶ所
らば其勲功を称しむる感状を賜ふる是より世の人勝
れを称して龍破世田と号せり

信長江別發向

元龜元年夏六月小田彈正忠信長を數万の軍兵を引陣し
後向し沙井之政長政を討破んと虎洲茶山に陣をえ長政が居
城小谷の近辺をさまぐ放火し妨とれども長政父子散り出て
戦ひかくてい事ゆくはじとて虎洲茶山を引拂ひ横山の城と改

んと惣軍陣留しころに沙井方の勇將丁村據守六百余騎よ
て退討小田の別士佐々内藤中条が監禁田九清門尉等後殿し
て防ぎ戦ひ双方死傷の者數百人終に沙井勢戦ひ屈して退散しけ
れば信長の大軍漸陣を龍ヶ鼻より移し其翌日六月廿三日惣
軍三万余騎横山の城を十重廿重より圍み息をもつたに攻め
たりけ城より沙井の勇士三田村九清門尉大時本佐後守村肥後等
を招きて強勇の士を余人数増せしむ大軍を少しも恐るに持は
ず固く矢石を飛ばし防戦をせし信長勢大軍をいとも急よ急よ
と進めし信長よりいさめし諸軍より急よ急よと進めし三日三夜
汗水をぬき走りたる城中も食をえ期し防ぎきれず益々疲
まうぬ防戦も若しと小谷の城沙井長政へ後詰を乞ふるをきりて



長政俄々城前へ役者を立召倉義宗より加勢を乞ふ義宗軍代
して新倉孫三郎義健を大將とて其勢都合さる万餘騎
日月廿六日に召よる大霧山に陣を布き安らひて長政換山乃
後諸氏は信長と雌雄を交はしとて明新義宗に召の兩軍を陣
村三回村へ出陣し安らひて陣を固め龍ヶ鼻へ向ふと新倉勢も
中合せ其用意をぞあつた安らひ長政の功居遠近は右邊門を忠
勇智謀のゆへに名士なりとも長政が父久政思ふて其計を
拒用しど計倣悉く國をなぐりぬと右邊門今心を定めて
其の陣も是をぞ死せんと主人の滅亡をぞめ居る人も情し
此合戦こそ我討死の期あらうと覚悟を定め其疾の勇士
と救ふに召にあらぬ酒宴を設けはく強ひ諸士は向ふくや

夕に明新味方勢村三回村の辺に陣とていふ事なき信長忽ち
姉川の方へ出陣し合戦は及ぶ一某いふに信長は旗本ま
ぎれ入信長とて死せんと思ふ者仕換へて討死して名は永
き世に傳へし勇も志を一致に忠義を勵む死後の英名は孫が
治ふるに酒宴こそ遠近が長きかと思ふとてはく酒宴を催し
たれより集りし諸勇士も遠近が我を助けまさんとかく勇は
き物語りいふの如くは怪しむ者もなかり多し後みちの
されあり

信長長政三回村張陣

其疾木下辰吉郎信長云ぬ言とて其某今宵浅井新倉の
陣へ竹候をせし款のありさまを伺ふと雲の如く何の憂ふれ

ゆもなりし又先刻より西陣とも俄に兵糧の用乏しく見えて煙
火びあしく三のかりいとしの明曉初めの合戦を企んと敵の構
必定せり又諸軍は御下知はるゝ合戦の所を配りて就るべき
やう信長をと思ひし疾中率に諸將を召し彼配りて御下知
先一番佐々木右近正盛に余二番佐々木三郎延照に余
人三番蜂谷兵庫次郎隆二に余人に後佐々木右衛門信成に余
五番高田三左衛門右成に余人次の信長に旗本の先
本下後者即秀吉に余二番の安藤守長に佐々木常陸守
右に佐々木次郎右衛門の勢に余人佐々木明智十兵衛光秀
麻惠多門家老に余三番の佐々木後陣佐々木谷九右衛門川尻兵衛
富平九左衛門等三に余人横山の城の押へに御下知信成殿を
と

して庭五郎左衛門永秀不破河内守に余三番の佐々木
佐々木のいも明る内より姉川へと押歩に後佐々木守長政
久政に三に余人を添小谷の城に其勢勢合を万余騎先陣
丹波守貞満をたおして高宮三河守大守守と河原を門
赤田信濃守等却てみ余三番佐々木守長政自らみ余三番
一廿七日の又天三田村表姉川に押へて西陣を合し佐々木
先ね破れ丹波守勇猛五郎の別兵を附あつて士率悉く勝つ
ある兵に其勢は猛虎のごとく丹波守をうし信長勢の腹に
うしをうし諸士み向いてやう此敵を破るは長蛇の陣に
突へるやみ左右をうしやう面と切崩し信長の旗をうし押
負を二撃に及べしと御下知を他人自身先は馬とて勇へん

信長
長政
三田村
陣
張る



押寄といひ信長の先陣坂本右近二万余人あつくと傑出する陣矣
以み近寄ぬといひ先陣より鉄炮をつゝ人放ちたる合戦とてゆふ

姉川合戦之始末

信長の先陣坂本右近丹波守の先陣坂本丹波守双方より槍を合
せ喰付く我々坂本丹波守時より一とひて左右に陣を
換炮術を下知してはまひけり忽ち右方より教百挺の鉄炮と雨
より撃ちあひければ坂本の兵士面をむくべき様なりと漂ひて見ゆ
る坂本丹波守とる勇戦今と自鎗を押し合はせしと喚て突
まれば坂本の陣より破れしと右往左往と敵れと足を見ん信
長の二番使池田兼三郎二万余人坂本又代て鎗隊入る坂本兵
士よりもたつらに池田が陣へ面より突て入切立難きその烈き

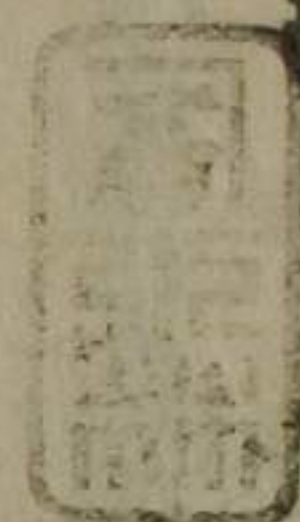
り電光の如く池田兼三郎よりひひと左右と列なり三
番使越谷兵庫次二万余人鎗をとり鉄炮を打ちけり向ふあり
何れもあつたゆへに敵波一智也と喚ひて鎗先をとり
互に互に突まれば越谷も突まらざれば是も左右に列あけ
るに番使（佐久間）佐久間二万余人鎗をとり周をめぐり
自陣より馬を乗出味方を下知して戦ふる坂本丹波守は
勝つとて破竹の勢ひ軍扇を用きたるはまひに許先とて
又突るれば佐久間使れじと自身鎗をひて敵より眼下
又六騎突つたり坂本丹波守は敵の振舞ふるに物見せんと
馬をうけさせをもうけんと突るれば佐久間獅子の怒りをほし
忽ち聲をさしまたは勇を震ふと戦ふありは双方はゆる様



あひだうん
姉川合戦の
始末



これさき内々くは引えいど一別は必勝の計略こそこれありとや
遠うるに量り勢此時火をとりて戦ひたれど不澄勝へさ食戦ふあ
らざれば本下が詞よささづい標引えた右へ門と退るが戦戦がらん
ひ只一突よ本下が体人を破り信長と討えど一と勇に勇
んが体人をとむ



繪本古図記二篇卷之三終

44

